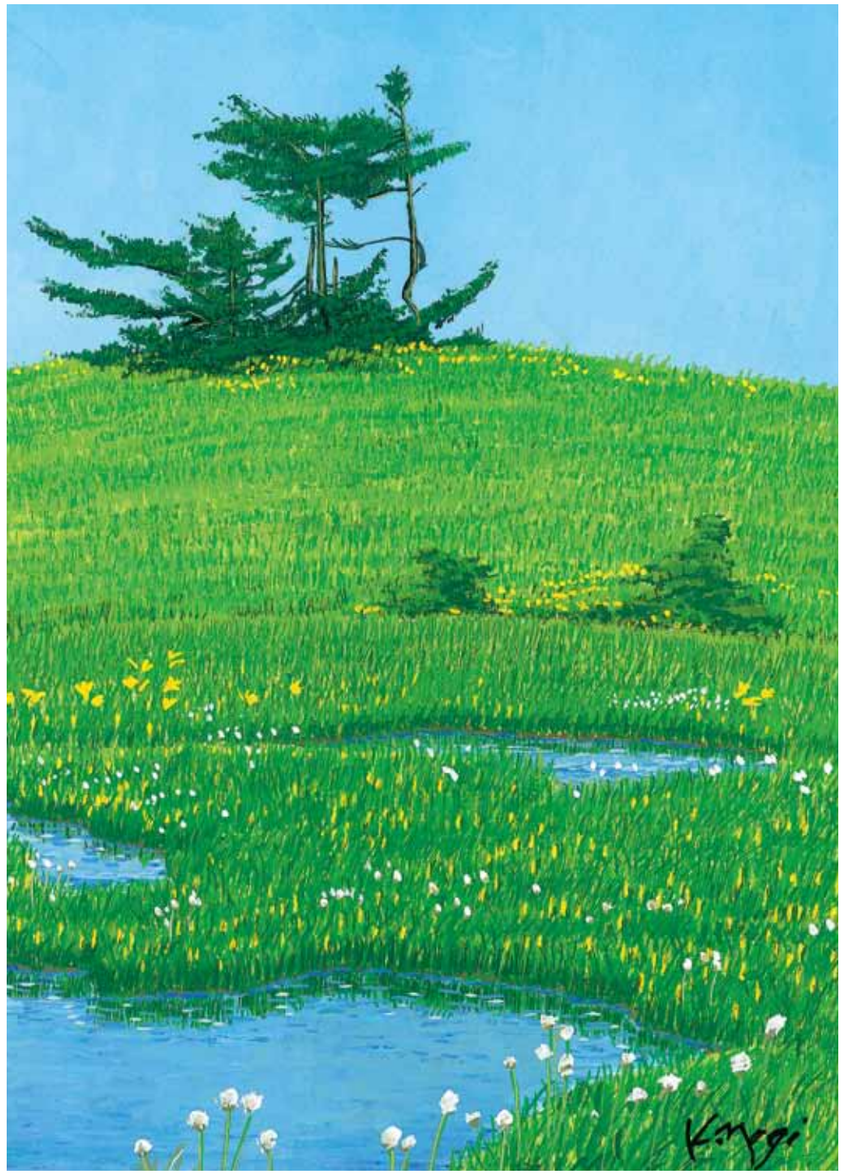
和's YAMATO
（わずやまと）

ご自由にお持ちください

夏号 2012

NHK大河ドラマ『平清盛』より
◎保元・平治の乱と平家の隆盛期
◎平治の乱の勝利により清盛の時代が到来する
◎平家の隆盛は頂点に

お客様紹介
◎桐生地方卸売市場(株)（みどり市）
◎スマートシティって何？



「夏天」（横田代）　茂木紘一画集「尾瀬春秋」より

『和's YAMATO（わずやまと）』の由来
ヤマトの漢字の「和」、Water & Air の頭文字を合わせて「WA」、「S」はスタート。ヤマトが発信するメッセージです。

スマートシティーって何？
～真に考えるべき“まちづくり”とは～

株式会社日立製作所 インフラシステム社
スマートインフラシステム総括本部
システム設計部 担当部長
立仙 和巳

はじめに

2009年1月、米国のオバマ大統領が就任し、政策の目玉となったのが「スマートグリッド」と呼ばれる、電力の安定供給や効率的な発電・供給を需要予測に基づくインテリジェントな電力システムであった。この「スマートグリッド」はさらに、都市を丸ごとスマート化する「スマートシティ」という言葉に発展し、地球温暖化や将来の石油の枯渇問題への取り組みがクローズアップされ、日本を含め世界のさまざまな国でスマートシティの実証実験が行なわれた。

「スマートシティ」とは何か、この数年で行なわれた取り組みと、本来我々が考えるべき“まちづくりの本質”について述べてみたい。

昨今のスマートシティーから感じること

①太陽光発電、②風力発電、③バイオマス発電、④蓄電池、⑤蓄熱、⑥スマートメーター、⑦電気自動車……昨今、実施されてきたスマートシティー関連の実証実験のほとんどのテーマは、この7つのキーワードに集約される。

これらは、スマートシティー構築を技術的な視点で考えると当然、取り組むべきであるが、その街に住む人（生活者）にとっての、必要性という観点から考えると違和感を感じる。

韓国、ソウルに清渓川(チョンゲチョン)という川があり、河川再生に伴い、川の上の蓋を取り、高架道路を撤去し、元の自然の状態に戻したという話がある。

日本でも「2030年日本橋プロジェクト」ということで、橋の上の高速道路を地下に移し、街の景観を元に戻す検討がされている。

これらの動きは、一見、近代化した都市をマイナーチャンジしたように見えるが、真の“まちづくり”とは、本来、その土地がもつDNAを活かしたまちづくりを行なえているかが重要と考えられる。

但し、これからの“まちづくり”として欠かせない要素は、地球環境への配慮である。

昨今、再生エネルギーということで太陽光パネルや風力発電が注目を浴びているが、突如として山の上に風力発電が森のように立っていたり、街全体に太陽光パネルが乗っている家並みを見かけたりして、無味乾燥な気持ちになることがある。

特にまちのインフラの構築に携わる我々メーカーは、“最新技術、高機能な製品こそが最適”という考えの下、必要以上に過度な提案をしてしまうことがある。（そこに棲む住民不在の“まちづくり（インフラ）”）

今後、“まちづくり”に携わっていく者として、“人間（生活者）中心”の観点を心がけ、真にそこで暮らす人が幸せを感じる“まちづくり”を実現していきたい。

大事なのは、その街にとって、「丁度良い景観」、「丁度良いインフラ」、「そこで暮らす人の丁度良い幸福感」を維持できる“丁度良いまちづくり”なのかもしれない。

これからの“まちづくり”への想い

世界一幸福な国はブータンということで、GNH（Gross National Happiness）なる幸福度の尺度を基に国の運営を進めているが、これからの“まちづくり”としては、GCH（Gross Citizen Happiness）の向上を目標とした“まちづくり”を進めるべきである。

最後に、今後、スマートシティを考えていく上で、ウェリントン・E・ウェッブ氏（元デンバー市長）の言葉を引用する。

・「19世紀は帝国、20世紀は国家、
　21世紀は都市（シティ）の時代」
・「都市を構成するのは市民。
　市民は生活をしながら
　さまざまな経済活動（ビジネス）を展開する」
・「その生活やビジネスを支えるのが、
　電気（エネルギー）、水、通信、交通、建物、
　行政サービスなどのインフラである。」

この言葉から分かるように、インフラはあくまで支えるものであり、主役は市民（生活者）なのである。

日本全国の“スマートシティづくり”に関わる人達が、まちづくりの本質を理解し、実行すれば、その先に日本がいつかGNH、世界一の国に生まれ変わっているかもしれない。

株式会社ヤマト
群馬県前橋市古市町118 〒371-0844
TEL.027-290-1800(代) FAX.027-290-1896
支店／東京、埼玉、栃木、横浜、千葉、高崎、東北　営業所／軽井沢、伊勢崎、茨城、太田、湘南、東松山、新潟、栃木市、長野、渋川、川口、多摩、東北、滋賀
附属施設／大和環境技術研究所、大和分析センター、加工センター、教育センター　ヤマトホームページ　www.yamato-se.co.jp/

和's YAMATO（わずやまと） 夏号 2012
株式会社ヤマトPR誌／和's YAMATO 2012 夏号／2012年6月発行
発行：株式会社ヤマト（総務部）

保元・平治の乱と平家の隆盛期

平清盛

今年１月より、ＮＨＫで放映されている大河ドラマ「平清盛」。今号では、ドラマ中の一つの山場である保元の乱・平治の乱と、その後の平家一門がいかに政治的な権力を築いていったかにスポットを当てる。

保元の乱が勃発

天皇家、摂関家で深刻な対立が表面化

保元の乱は、保元元（一一五六）年に京都の鴨川を挟んで勃発した、皇位継承をめぐる内乱である。平清盛が加勢した後、白河天皇側が崇徳上皇側に勝利する。

当時は、天皇の朝廷と、上皇や法皇を頂点とする院庁がそれぞれ行政権を持つ二重権力構造になっていた。しかし、当然のことながら天皇は一人なので、天皇側か上皇側か、どちらから天皇に即位するのかで、もめることとなる。

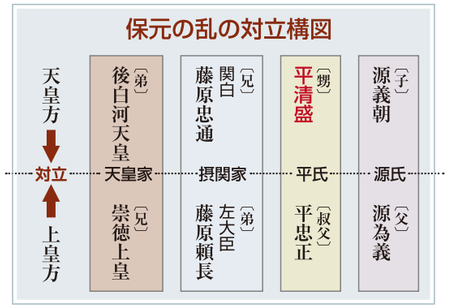
保元の乱の前年にあたる久寿二（一一五五）年に、近衛天皇が十七歳の若さで急逝し、子供（皇子）がいなかったため政争が発生した。現代のように、誰が後継の天皇になるかのはっきりとしたルールが無いので、政治的な策略が横行する。崇徳上皇は近衛天皇と雅仁親王（後の後白河天皇）の兄で、自分の皇子が天皇になれるのではとの期待を持った。

鳥羽上皇は、長子の崇徳上皇は自分の実子でなく、自分の祖父である白河天皇の子ではないかとの疑念を持っていたので、崇徳上皇を疎んじてきた。そのためか、鳥羽上皇と中宮の美副門院（藤原得子）は、崇徳の弟である雅仁親王を即位させ、後白河天皇とした。崇徳上皇は父の仕打ちに落胆し、父子の対立が深刻化する。

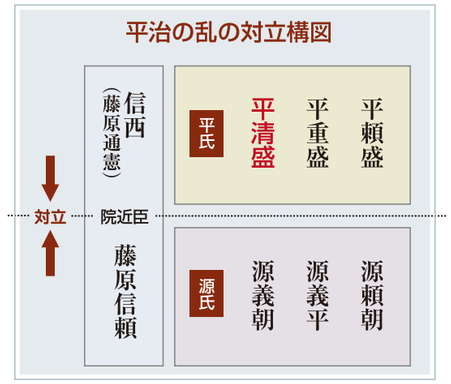
一方、藤原摂関家内部では、頼長、忠道の兄弟が、関白の座を巡って対立していた。近衛天皇の関白は忠通だったが、白河法皇によって権力から遠ざけられていた忠通の父・忠実が、鳥羽法皇によって関白に準ずる内覧という役職に就いたため、父子間で権力争いが起こる。忠実はもう一人の息子である頼長を擁し、忠通を排斥しようとし、忠実・頼長父子と忠通との間で対立が深まっていく。

天皇家、藤原摂関家内の対立は日ごとに激化していった。鳥羽・白河の天皇側は関白の忠通と組み、他方、必然的に崇徳と頼長が手を結ぶことになる。両者の対立は保元元（一一五六）年の鳥羽法皇の崩御によって一気に爆発した。後白河天皇は鳥羽崩御のあと、すぐに勅令を出し、平清盛、源義朝をはじめ源平両氏の精鋭を召集した。対する崇徳側は、藤原摂関家と親密な河内源氏の棟梁・源為義を立てて応戦することとなった。戦いは清盛が加担した天皇側の圧勝で、四時間ほどで終結する。

この乱は、日本の歴史上はじめて武士が政争に加わり、武力によって解決が図られるケースとして、歴史に残ることとなる。まさに、武家中心の時代を予見する出来事であったといえるだろう。



保元の乱では天皇方の清盛、義朝が昇進した。



平治の乱は信西と信頼という、後白河法皇の近臣同士の対立が火種となった。信西が死んだあとは、清盛によって信頼は捕らえられ斬首、王権の混乱に乗じた格好で、清盛の権力基盤が確立された。

高松神明神社（たかまつしんめいじんじゃ）

後白河天皇の御所のあった場所で、高松殿と呼ばれていた。
保元の乱では、後白河天皇側の本拠地となり、清盛や義朝が参集した。
平治の乱で御所は焼失、高松明神を祀る神社として今に至る。

熊野那智神社

清盛が熊野詣のため京を離れた時に平治の乱が起こった。平氏一門の繁栄は熊野権現のご利益ともいわれ、後白河上皇は30回以上も熊野を詣でたという。

【略年表】

久安6（1150）年	摂関家の家督争いが起きる
久寿2（1155）年	7月、近衛天皇崩御、後白河天皇即位
保元元（1156）年	7月、鳥羽法皇崩御、保元の乱が起こる
平治元（1159）年	平治の乱がおこる

保元・平治の乱を通じて、清盛は王権の主要な警察力を掌握する。保元・平治の乱での勝利が、清盛が作った武家政権の端緒となった。

京都御所の紫宸殿（ししんでん）

平治の乱では、清盛は義朝と信頼を討つため、御所に攻め込んだ。

京都市内を流れる鴨川の春の風景。保元の乱では、清盛は二条大路から鴨川を渡り、300騎の軍勢を率いて進軍したといわれる。

平治の乱

後白河上皇の近臣同士が争う

保元の乱のあと、清盛は後白河天皇（後に上皇）から厚遇され、平氏一門は北面の武士の中でも最大勢力となっていた。当時、朝廷で権力を握っていたのは信西（しんぜい）であったが、政治的な改革に着手しており、藤原摂関家から反感を買っていた。信西は皇室の権威を高めるために、摂関家の弱体化を画策しており、摂関家の所領の没収などを実行に移している。また、摂関家と親密な源氏の力を削ぐため、政治的な動きをしていた。

後白河上皇は信西に政治を担わせながらも、摂関家の藤原信頼を取り立て、信頼は彗星のごとく異例の出世を遂げる。出世欲の強い信頼は後白河上皇に取り入ってさらなる出世を望んだ、しかし腹心である信西がそれを阻止する動きをしたため、信頼は信西を恨むようになる。信頼は源義朝に近づき、信西追討を持ちかけた。義朝は信西に養子縁組を断られ、挙句に信西が清盛との養子縁組に応じたため面目をつぶされ、信西を恨みに思っていた。

かくして、信頼と義朝勢は平治元（一一五九）年、後白河上皇の三条烏丸御所を数百騎の兵で襲い、上皇を内裏（天皇の館）から連れ出し火を放った。しかし信西は事前に信頼の謀反を察知し、御所から逃げ出していた。信西は山中に潜んでいたが数日後に自害、その後遺骸を発見され、首を切られて晒（さら）された。

清盛は、この乱が起こる五日前に熊野詣に出かけており、京にはいなかった。信頼と義朝は清盛を恐れていたから、その留守を狙ってクーデターを起こしたのかもしれない。清盛は信頼を討つべきであったが、信頼は後白河上皇と二条天皇をかくまっており、そこを攻撃すると賊軍となってしまいかねない。そこで清盛は、信頼に臣従するふりをして油断させ、部下に二条大宮を放火させた。その混乱の渦中に、女装した天皇を牛車に乗せて脱出させる。二条天皇は、六波羅にある清盛の屋敷にかくまわれた。後白河上皇も内裏を脱出し仁和寺に逃れ、その後清盛の屋敷に移った。

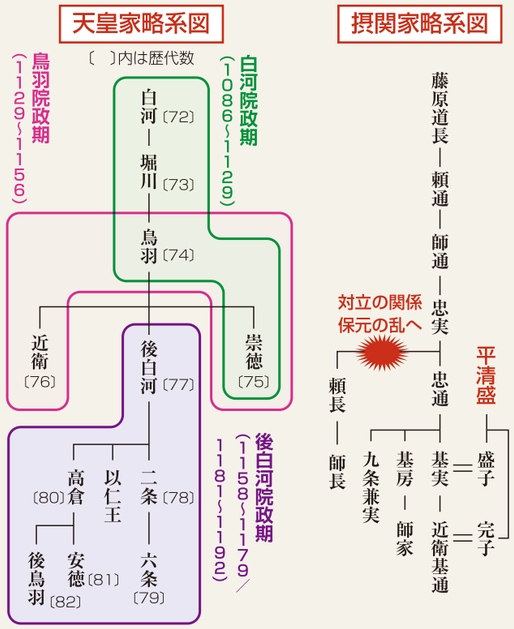
清盛は二条天皇から源義朝追討の宣旨を受け、長男の重盛を大将にして、義朝を攻めた。義朝は尾張に落ちのびて落命、十三歳だった三男の頼朝は、伊豆に流された。信頼は平氏に捕えられ、六条河原で斬首された。

保元の乱は天皇家や摂関家の争いであったが、平治の乱は平家と源氏の武士同士の争いが中心となった。平治の乱こそ、武士が貴族の傭兵という立場から抜け出し歴史の主役になった、ターニングポイントであったといえよう。

六波羅蜜寺境内にある平清盛公の塚

六波羅蜜寺

六波羅蜜寺は天歴五（九五一）年に醍醐天皇の第二皇子である空也上人により疫病の平癒のため開創された。平安後期には、平忠盛が伊勢から兵を連れて上洛した際の宿所とした。以後、清盛が権勢を誇った時代には、広大な寺域には平家一門の邸館が五千二百余を数えた。寿永二（一一八三）年の平家没落に際して兵火を受け、ことごとく焼失、本堂のみ焼失を免れた。



三條東殿遺址

三条東殿遺址（さんじょうひがしどののいし）

「三條東殿遺址」の石碑。ファッションビル「新風館」の脇にある。三條東殿は、保元の乱が発生した時、後白河天皇の本拠地となった。元は摂関家の邸宅で、白河法皇がこの地を取得し、豪華な殿舎を造営して院の御所とした。その後は鳥羽上皇、後白河天皇の御所となった。源義朝が平治元（一一五九）年にここから法皇を連れ去って幽閉したため、平治の乱が勃発する。その際、武士と火焔（かえん）に追われた多数の官女が、三條東殿の井戸に落ち非業の死を遂げたという。

平安朝の政治システムに武士の武力が組み込まれる

保元の乱終結後、後白河天皇からの清盛への信頼はさらに厚くなっていた。その理由は、後白河天皇の側近である信西（しんぜい）（藤原通憲（みちのり））が清盛を重用したからであるとされる。当時、信西は「新制七カ条」を出して記録荘園券契所を復活させた。さらに不正な荘園を公領へと組み込むなど、大胆な国政改革にも着手し、矢継ぎ早に新制を発令する。この改革を強力に推進するために、信西は清盛の経済力と決断力を必要としていたわけである。当時、清盛はすでに宋との貿易振興などで、武士ながら貴族にも引けを取らぬ莫大な富を築いていた。

清盛に肩入れした信西は身分の高い家柄の出では無く、比較的新しい院陪臣（いんのばいしん）（有力公卿のこと）であったが、後白河天皇の政治運営に深く関わってきて、その一族は政権基盤の中枢を占めていた。しかし、このような信西一門への政治権力の集中は、しだいに他の院陪臣の反発を招くに至る。当時の院の政権内では、政治の実務を担う家、また現在の県知事のように地方の経済を担う家といったように、各自役割分担をしながら、微妙な均衡を保っていた。そこに、信西一族が他の院陪臣を追いやり、主要な官職を独占する動きを見せたわけで、大いに反発を受けたのも当然のことであった。

保元の乱の後、政権を構成する貴族たちは後白河院政を望むグループと、二条天皇の親政を望むグループとに分かれ、対立の兆しも見せていた。そして、両方の集団は同じく信西を疎んじていたため、共に結束して反信西の動きを加速したことが、平治の乱へと発展していく。

しだいに反信西の機運が高まる中、後白河上皇は近臣として藤原信頼を権中納言に抜擢する。信頼の一族は武蔵や陸奥の国（現在の東北地方）の管理をしており、両国と深い繋がりのある、源義朝を配下に置いていた。東国で強力な武士団を有している、義朝との関係を強化した藤原信頼は、中央政界で徐々にその存在感を増していく。

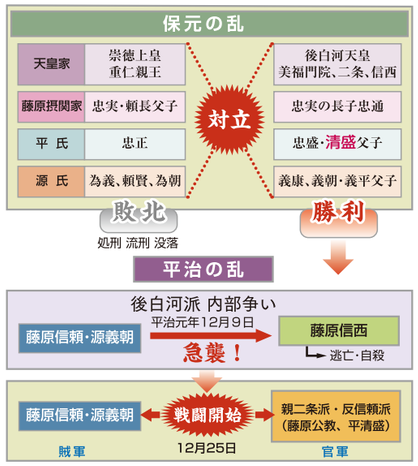
このように政権内部での様々な対立が錯綜する中、平清盛は当初中立を保っていた。そして、平治元（一一五九）年十二月九日、藤原信頼、源義朝の反信西派が、院御所となっていた東三条殿を襲撃し放火、平治の乱が勃発する。信西は御所から逃げ出していたが結局は捕らえられ、その首は獄門にさらされた。本来信西の追い落としのために結集した政権の諸勢力だったが、信西亡き後、藤原信頼が政権運営に意欲を示すようになると、それに反感を持つ二条天皇親政派の勢力が現れ、政権内部はさらに混乱をきたす。

同年十二月二十六日、信頼によって内裏に幽閉されていた二条天皇と後白河上皇は、平清盛の機転によって脱出することができ、信頼とその配下の源義朝は謀反人となった。この騒乱で信頼と義朝は平氏に討たれ、清盛率いる平氏のみが一躍政界に君臨することとなった。

白峯神宮の外観

白峯神宮

崇徳上皇を祀るため明治天皇が創建。崇徳上皇は保元の乱により讃岐国（現在の香川県）に配流になり、無念のうちに生涯を終える。遺骸は白峰陵（香川県坂出市）に葬られた。その頃京都では大火や高貴な方の相次ぐ死亡など不吉な出来事が続き、崇徳上皇の怨念によるものと恐れられ、後白河法皇は御影堂や廟を作り慰霊に努めた。それらは応仁の乱でいずれも焼失したため、明治天皇の父の孝明天皇が、都で慰霊のための神宮建立を考えたが急逝、その遺志を継いだ明治天皇が、讃岐白峰寺の上皇の木造を白峯神宮に祀った。



三十三間堂本堂の外観

三十三間堂

正式には蓮華王院（れんげおういん）（国宝）といい、清盛が長寛二（一一六四）年に、後白河上皇の院政庁「法住寺殿」の一角に造進した。約80年後に焼失したが、文永三（一二六六）年に再建された。その後4度の大修理を経て、七百余年間保存されている。正面の柱間が三十三あるところから、三十三間堂と通称される。中央の巨像（中尊）を中心に、左右に各五百体、合計1,001体がご本尊となっている。

法住寺殿址の碑

先手観音坐像と千体千手観音像（三十三間堂の案内しおりより）

武士の時代の到来を告げる保元の乱は、いかに勃発しいかに終結したか

天皇や上皇を中心にして貴族たちが政治を司る平安の都が、敵味方入り乱れての戦場になったのは、保元の乱が初めてのことであった。鳥羽上皇の没後、兄の崇徳上皇と弟の後白河天皇が対立。藤原摂関家でも、藤原忠道と道長の異母兄弟が、氏長者（うじのちょうじゃ）（平安時代以降の氏（うじ）の中の代表者の呼称）の後継を巡り対立していた。武士の集団である源氏と平氏も、その主従関係によって、源為義・為朝親子と平忠正らは崇徳上皇側についた。また平清盛、源義朝らは後白河天皇に与して、互いに敵対することとなった。

保元の乱以前の朝廷内部の権力争いとは、従来は「権威」によって権力を強めることに終始するものであったといえよう。たとえば、政敵が中納言に抜擢されたら、己はさらにその上の大納言になるために活動するといった具合である。しかし、武士の勢力が強まってくると、貴族たちはこうした活動のみにとどまらず、子飼いの武士の武力を使って、その権力を強化しようとする動きもするようになった。いわば闘争の中心が、貴族の任官競争から、武士による武力行使に移行していったわけである。

保元元年七月二日、鳥羽法皇が崩御、その三日後の七月五日には後白河天皇が崇徳上皇・藤原頼長の謀反の噂を流し挑発しながら、崇徳方に軍備の禁止を命じる。そして、九日の夜に、崇徳上皇は後白河天皇を攻撃する準備のため、白川北殿（しらかわきたどの）（現在の京大病院付近）に入る。しかし、十一日未明、先手を打ったのは後白河陣営側で、白川北殿に突如夜襲をかける。平清盛・源義朝の軍勢六百余騎は、鴨川で防衛線を張る崇徳陣営と激突した。一時は混戦となったものの、やがて白川北殿に火の手が上がり、乱は約四時間で終結、後白河天皇側の圧勝となった。

この保元の乱の勝利に大きく貢献し最大の恩賞を得たのは、清盛率いる平家一門であった。その結果、単なる王家の護衛としての任務に限定されていた武士が、当時の貴族社会における派閥争いを武力によって解決するという新たな局面で、歴史の表舞台に登場するに至った。それまでは天皇、上皇などを頂点とする朝廷内の上級貴族が、政治権力の掌握をめぐり、政治的な駆け引きに終始していた。しかしそうした政治の世界も、武力を持った武士をいかにうまく利用するかで、政争の勝敗を左右するようになった。間接的にせよ、武士が国政に影響力を及ぼすようになったのである。保元の乱こそ、武家社会の到来を予見する、画期的出来事だったといえよう。

平治の乱の勝利により清盛の時代が到来する

平 清盛

建仁寺

臨済宗建仁寺派の大本山で、京都五山の第3位に列せられる。建仁2（1202）年、禅僧の栄西が、鎌倉幕府2代将軍頼家の援助で創建。境内南側にある勅使門は、清盛の嫡男・重盛の邸宅の門を移築したものと伝わっている。

平 清盛（平清盛像：音戸（おんど）の瀬戸公園）
「平家物語」に代表されるように、従来の平清盛は源氏の敵役として登場することが多く、特に晩年の権力に執着する人物像が定着している。これに対して、今回の大河ドラマでは、清盛は武士が中心となる政権を初めて作るなど、時代の変革者として描かれている。

清盛の活躍により、平治の乱が終結する

保元・平治の二つの乱で、その収束にもっとも貢献したのは平清盛であったが、清盛は後白河上皇、二条天皇のどちらにも積極的に与することなく、巧みに政界で実力を発揮していく。平氏一門は朝廷内での要職を占め、公卿は十人以上、殿上人は三十人以上といわれるほどの繁栄を極めた。

平治の乱以後、それまで権力をほしいままにしていた信西がいなくなり、信西がとった数々の政策により摂関家の力も衰え、昔日の影響力は一気に影を潜めていた。

平治の乱は天皇親政派の勝利となったが、乱のさなか、藤原信頼らにより幽閉されていた二条天皇を救出したのが藤原経宗（つねむね）、惟方（これかた）の天皇側近であった。そして、この二人は朝廷内での発言力を徐々に強めるに至った。さらに、これらの勢力は二条天皇親政派として、院政により実権を握りたい後白河上皇と対立することになる。また、摂関家の再興をめざす近衛基実、治外法権的に独自の勢力を温存する延暦寺派など、保元・平治の乱が終わっても、政界の権力争いの様相は以前不安定な状態であった。

こうした不穏な政情の中、二条天皇親政派の藤原経宗（つねむね）、惟方（これかた）は、後白河上皇に対する圧迫を強めていき、それに反発した後白河上皇は、清盛に二人の逮捕を命じる。清盛はその命に従い、二人を捕え、遠方に配流（京から追放すること）した。天皇の側近と言う身分の二人を、有無を言わさず配流できたのは、経宗、惟方が平治の乱では信西殺害の共犯者であったものの、乱後は平然と政権中枢に居座っていることへの、貴族社会からの強い反発があったからと思われる。

いずれにせよ、清盛による二人の配流で平治の乱の戦後処理は終了し、平家は政権の安定にとって無くてはならない存在となっていく。

平安神宮の應天門

平安京大内裏の正庁・南面の正門。この門は明治28年に再建されたもの。

平安神宮

旧法住寺御陵正門

法住寺殿址の碑

法住寺法華堂陵前

法住寺

平安時代中期に源為光が創建した天台宗の寺院。その後、後白河上皇がこの寺を自らの御所・法住寺殿を造営した。

法住寺殿は、後白河院が約30年にわたり院政を行った政庁。上皇になると、天皇の御所とは別の場所に専用の「院御所」を造営するのが通例で、白河・鳥羽の両帝に続き、そのたびに大規模な土木工事が行われた。法住寺合戦の際に木曾義仲に焼き払われ、後白河法皇は六条・西洞院の六条殿に移り、この法住寺殿で生涯を終えた。法皇の死後、法住寺殿の敷地内に隣接する法住寺には法華堂が設けられ、後白河法皇の陵とされた。

白河院庭園

もとは藤原良房の別荘で、藤原北家から白河天皇に献上された。承保2年（1075）年に、白河天皇によって法勝寺が建立された。

清水寺

坂上田村麻呂を本願とする北法相宗の大本山。平安時代は興福寺の配下にあったため、延暦寺と興福寺の争いに巻き込まれ、焼失したこともある。

高松殿址の碑

保元の乱の際には、高松殿が後白河天皇側の拠点となった。その鎮守社が高松神明神社で、平治の乱の際に焼失し、室町時代になって高松神明宮宝性院として再建された。高松殿は、平安時代初期に醍醐天皇の皇子・源高明（みなもとのたかあきら）の御所として建てられたもの。その後、後白河天皇がここで即位し、里内裏（天皇が日常を過ごす内裏）として定められた。

平清盛

長楽寺

桓武天皇の勅命により延暦年間（800年頃）に、伝教大師（最澄）を開基として創建されたと伝わる。文治元（一一八五）年、安徳天皇の生母・建礼門院が剃髪した寺院でもある。

二条天皇と後白河上皇の対立

応保元（一一六一）年九月、平家一門にさらなる重要な出来事が起きる。後白河上皇と平滋子（清盛の妻・時子の異母妹）の間に皇子が生まれたが、この人物こそ後に高倉天皇となる憲仁親王であった。後に、その憲仁親王を立太子（正式に皇太子にすること）にしようとの動きが発覚する。しかし、二条天皇にとっては、後白河上皇の子・憲仁親王が皇太子になり天皇になる道筋が出来上がるのは、非常に不本意なことであった。それは、二条天皇の、我が子を天皇にして自らが院政をしく将来像が消えてしまうことを意味し、断じて看過できないと考えるに至る。激怒した二条天皇はついに、後白河上皇の院政を停止する命を下した。

後白河上皇と二条天皇は親子ではあったが、二条天皇は美福門院の養子で、鳥羽上皇を継ぐ系統の親王として、次期の天皇にすることが、美福門院の意向であった。ちょうどその中継ぎとの位置付けにすぎなかったのが後白河上皇だった。しかし着実に自らの院政を強化し、次代にも影響力を持とうとしていたため、後白河上皇と二条天皇との対立は、日増しに深まっていった。

憲仁親王と清盛は親戚関係ではあるが、清盛が憲仁親王の立太子に関与していたかどうかは定かではない。清盛は二条天皇を支えることを明らかにしており、皇位をめぐる確執が深まる中にあって、配下の武士に天皇御所の警護を命じている。さらに清盛は、摂関家とも姻戚関係を結ぶため、娘の盛子を近衛基実に嫁がせている。当時の摂関家は、荘園管理の武力として見込んでいた武士勢力が衰退していたため、平家に頼らざるを得ないという窮状ぶりであった。

一方で清盛は、院政を停止させられた後白河上皇への配慮も怠りなく、長寛二（一一六四）年には三十三間堂（蓮華王院の本堂）を造営し、多額の寄進をしている。武士として初めて公卿となった清盛だが、そうした社会的な地位の向上だけにとどまらず、所領からの税の徴収や荘園の管理を通じて経済的な恩恵をもたらした。つまり、政治的に弱い立場になった勢力には、経済的な支援で平家への協力体制を保持し、平家一門の発展を図っていったわけである。

後白河上皇の院政が復活

そうした結果、どの勢力においても清盛の存在は無くてはならないものとなり、長寛三（一一六五）年に二条天皇が崩御すると、清盛の影響力はさらに増していった。

年明けから体調を崩していた二条天皇は、四月上旬には病状が悪化、六月末には順仁親王に譲位し院政を強行しようとしたが、その一ヵ月後に崩御する。

また、藤原摂関家の氏長者で六条天皇の摂政を務めていた基実も、仁安元（一一六六）年に二十四歳の若さで急死した。これをもって、後白河上皇と二条天皇の対立は終結し、後白河上皇の院政が五年ぶりに復活するに至った。

熊野神社

聖護院（天台宗系の単立寺院）由来の鎮守社。修験道の祖とされる山伏・日円が、紀州熊野権現を勧請したのが始まりとされる。応保二（一一六二）年に平清盛が境内の土や花木に至るまで紀州熊野の本社から運搬して造営した。熊野若王子神社、新熊野神社とともに京都熊野三山と称されている。

新日吉神宮

永歴元（一一六〇）年、後白河上皇の命によって、法住寺殿（後白河上皇の御所）の鎮守社として創建された。延暦寺の鎮守神である山王七社が比叡山東の坂本から勧請されている。初代別当は後白河上皇の護持僧（祈祷を行う僧の職）を努めた妙法院の昌雲。応仁の乱で衰退したが、江戸時代に再興した。

雙林寺

延暦年間（782～805）に最澄が創建したとされる天台宗の寺院。清盛と同い年の歌人・西行の供養塔がある。

西行庵

西行の住居跡とされている。西行は清盛と同じ北面の武士であったが、23歳で出家し放浪の歌人となった。

平家の隆盛は頂点に

平清盛

このような宮中政治の大改編があっても、平家の財力と軍事力は朝廷にとって依然欠かせない存在であり、清盛の政治的な地位は揺るがなかった。政治的手腕に優れていた清盛は、かねてより政権交代をその視野に入れていたのかもしれない。

仁安元（一一六六）年十月、基実の急死から三ヵ月後、憲仁親王が立太子の礼で皇太子となった。清盛はこれに全面的に協力し、後白河直系の天皇の擁立に向けた布石が打たれていく。清盛にとっても、義理の妹の子が天皇になるのは大いに歓迎できる出来事であった。こうして、平家一門と後白河上皇の政治同盟はさらに強固に築かれていくことになる。

清盛の政治的な地位は留まることなく向上していき、仁安二（一一六七）年六月にはついに太政大臣にまで登りつめる。清盛の急激な昇進には、自らが王家正統であることを示し、政権運営を援助させようとする、後白河上皇の意図が働いていたことはいうまでもない。

そして、仁安三（一一六八）年に高倉天皇が即位、承安元（一一七一）年には清盛の娘・徳子が高倉天皇に入内（結婚）、翌年には中宮（皇后）に立てられた。徳子が産んだ皇子が即位すれば、清盛は天皇の外戚となる。平安王朝の一員である以上、最高権威である天皇の身内になることが、家の権威と政治的発言力の強化につながることは明らかであった。平家一門の社会的影響力は、この時頂点に達していたと言えよう。

厳島神社

平清盛の養母と伝えられる祇園女御を祀る神社。京都御苑の南西に鎮座し、平清盛が崇拝した宮島にある厳島神社の分社の一つ。のちに五摂家の一つ、九条家の庭園（九条池など）内に取り込まれ、九条家の鎮守社として扱われた。厳島神社の境内にある唐破風（からはふ）（中国の「唐」から入ってきたものではなく、日本独自の建築様式）の鳥居は、京都三珍鳥居の一つとされる。

六波羅珍皇寺（六道の辻）

現世と冥界との間に建つ六波羅珍皇寺。近くにある風葬の地・鳥辺野へ至る道筋にこの寺がある。ここで野辺の送りの法要を行ったところから、「六道の辻」と称され、他界（地獄）への入口とされてきた。

若一神社

清盛の邸宅・西八条弟（にしはちじょうでい）にあった鎮守社とされている。平家一門は、六波羅を本拠地としていたが、清盛は西八条に別邸を設けていた。境内には清盛お手植えの大楠があるほか、束帯姿の清盛の石像や清盛ゆかりのご神水などがある。

若一神社

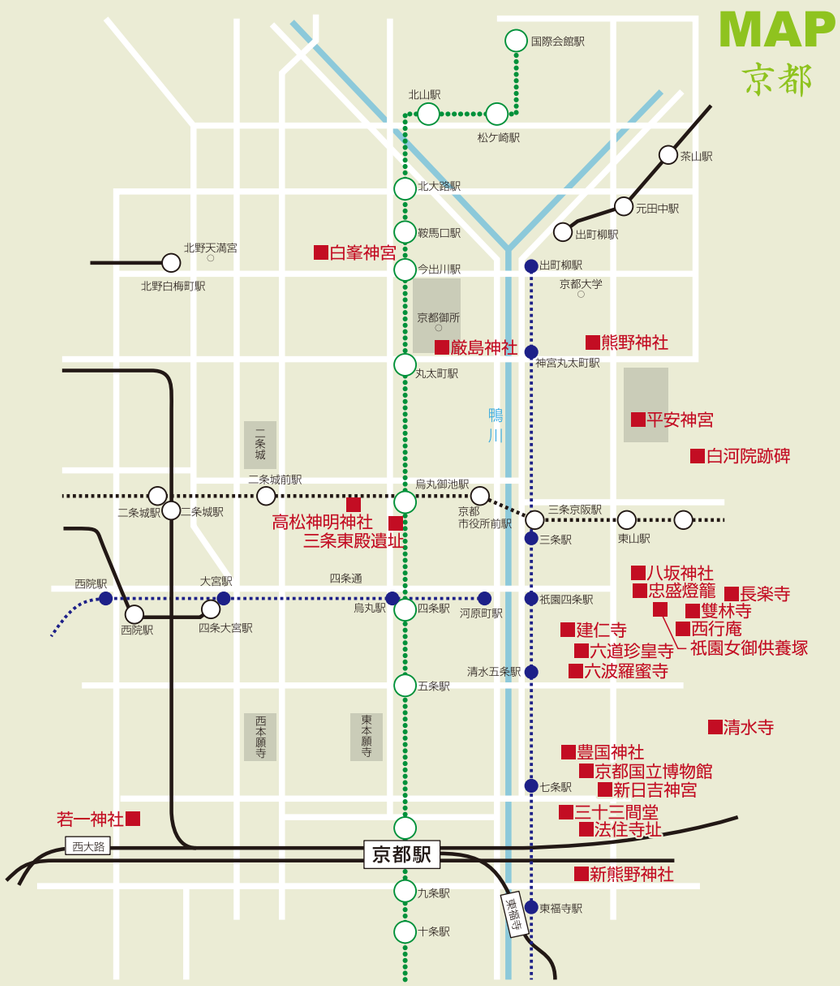
御神木

清盛ゆかりの御神水

西八条殿跡

平清盛像（若一神社内）

若一神社遠景



平清盛　関連年表

躍進期	1118 元永元	1	白河	清盛生まれる。父忠盛。母は白河院寵妃の祇園女御とする説が有力。
	1131 長承元	14	鳥羽	父・忠盛が備前守となり上級貴族となる。
	1135 保延元	18		父・忠盛が西国海賊の討伐に成功。その功で清盛が従四位下に昇進。
	1139 保延五	22		長男・重盛誕生。
	1147 久安三	30		祇園闘乱事件で罰金刑を受ける。三男・宗盛誕生。
	1151 任平元	34		安芸守となる。
	1153 任平三	36		父・忠盛死去。伊勢平氏の棟梁になる。
	1155 久寿二	38	後白河 二条の 二頭政治	後白河帝即位。
	1156 保元元	39		保元の乱。その功で播磨守となる。
	1158 保元三	41		太宰府の高官となる。二条帝即位、親政派と後白河院政派の対立。
全盛期	1159 平治元	42		平治の乱。翌年、その功で正三位参議（公卿）となる。 武家の棟梁となり朝廷の軍事力・警察力を掌握。
	1161 応保元	44	二条 親政	二条帝親政。妻の妹・建春門院滋子が後白河上皇の皇子（後の高倉天皇）を産む。
	1164 長寛元	47		娘・盛子が藤原基実（二条帝関白、六条帝摂政）に嫁ぐ。厳島に納経。
	1165 長寛二	48	後白河	二条帝崩御・六条帝が即位し、後白河院政開始。
	1166 長寛三	49		摂政・藤原基実死去。
	1167 仁安二	50		従一位太政大臣に任命されるが、3カ月で辞任。 重盛が権大納言に任宮。
	1168 仁安三	51		六条帝退位。高倉帝即位。清盛病に倒れ、出家し、青蓮と称する。福原に居を移す。 厳島神社造営を申請。
	1171 承安元	54		三女・建礼門院徳子が高倉天皇に入内。
爛熟期	1176 安元二	59		建春門院滋子死去。
	1177 治承元	60		鹿ヶ谷の陰謀。俊寛ら遠島の刑。
	1178 治承二	61		建礼門院徳子が高倉帝の皇子を産む（後の安徳帝）。
	1179 治承三	62	高倉	重盛（清盛の長男）死去、後継は宗盛（清盛の三男）。 治承三年の政変で後白河法皇幽閉。
	1180 治承四	63		安徳帝即位・高倉帝の院政。以仁王の令旨。福原遷都。 源頼朝、源義仲の挙兵。冨士川の戦い。京都遷都。近江攻防。南都焼き討ち。
滅亡機	1181 治承五	64	後白河	高倉帝崩御、後白河院政復活。清盛死去。
	1183 寿永二			倶利伽羅峠の戦い。平家都落ち。義仲上洛。後鳥羽帝即位。
	1184 寿永三			宇治川の戦い、義仲滅びる。源義経上洛。一の谷の戦い。
	1185 文治元			屋島の戦い。壇ノ浦の戦い、平家滅亡。鎌倉幕府樹立。

参考文献　平清盛伝　京都源平地図本（㈱ユニプラン発行）

八坂神社

須佐之男命（すさのおのみこと）などを祀る神社で、明治の神仏分離令が出るまでは祇園神社や祇園社とよばれていた。

八坂神社

平清盛

祇園女御供養塚（ぎおんにょうご）

平家物語に平清盛 の母として登場する祇園女御が建立したとされる阿弥陀堂は、この付近にあったと伝えられる。祇園女御は白川法皇の寵妃で、平家物語によれば、懐妊した祇園女御を平忠盛に下賜（かし）し、生まれた子が清盛とされている。

忠盛燈籠

忠盛燈籠

永久年間（12世紀）の雨の降る夜、白河法皇が祇園女御のもとに赴くためにこのあたりを通った時、前方に鬼のようなものが見えた。法皇は供の平忠盛に討ち取るように命じたが、忠盛はその正体を見定めた。すると、燈籠に火を灯そうとした祇園の社僧であった。これは、その時の燈籠といわれている。

太閤塀（法住寺）

豊臣秀吉が文禄4（1595）年に作った、大仏殿方広寺（現・国立博物館一帯）の南門から続く築地塀。高さ5.3メートル、長さ92メートルの堂々とした建造物で、瓦に太閤桐の文様を用いている。

祇園の御神水
現在はペットボトルで売られている

祇園水

白峯神宮（4ページ参照）

白峯神宮
マリを扱うスポーツ全般の守護神を祀り、全国で唯一の「闘魂守」を求めて各地から参詣がある。

崇徳天皇欽迎之碑

伴緒社（ともものおしゃ）（源為義と源為朝を祀る）

昭和天皇お手植の松

ーウルトラ エコ・アイス システムー

桐生地方卸売市場の青果物冷蔵庫は、外見は従来の冷蔵庫と同様ですが、「ブライン冷却システム」と「氷蓄熱システム」を組合せた地球環境にやさしい最先端の冷却システムを導入しております。

ウルトラ エコ・アイス システムによって、

❶ ランニングコスト低減　❷ 昼間の消費電力低減
❸ フロンガス漏洩量低減(温室効果ガス排出量低減)
❹ 商品高鮮度管理

を実現しています。

桐生地方卸売市場株式会社 青果物冷蔵庫 環境配慮型氷蓄熱システム（ウルトラ エコ・アイスシステム）

蓄熱冷凍機20HP×2台・蓄熱槽14㎥

ブライン冷却器

【 導入メリット 】

[フロン直膨方式のプレハブ冷蔵庫との比較]

①[節電対策]
昼間の消費電力低減
約 17 kW38% 低減

②[経費削減]
ランニングコスト
約 80万円/年 低減

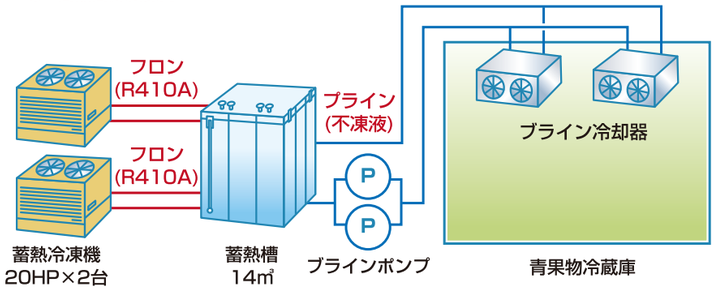
③[フロン対策][温室効果ガス対策]
温室効果ガス排出量
約 58 t-CO_2/年 低減

④[商品高鮮度保持]

【 冷蔵庫概要 】
◎冷蔵庫内温度　5～7℃
◎冷蔵庫内保管物野菜、果物
◎冷蔵庫規模　303㎡（約…92坪）
・仕分け冷蔵庫　191㎡（約…58坪）
・保管冷蔵庫　112㎡（約…34坪）

【 設備概要 】
蓄熱冷凍機　20HP × 2台
蓄熱槽　14㎥　×1台
ブライン　プロピレングリコール
ブライン冷却器 6台

竣工:2012年3月／設計・施工 株式会社ヤマト



（フロンガスは、蓄熱槽と蓄熱冷凍機関の配管に一部使用しています）

1. ランニングコストの削減

「蓄熱システム」は、夜間に冷凍機を運転して蓄熱槽内に氷を作り、昼間は前日の夜間に作った氷を利用する事で、昼間の消費電力を低減できる「節電対応型システム」です。

夜間蓄熱の電気料金は昼間に比べて安い事と、昼間の消費電力を低減する事で、ランニングコストを年間で約80万円低減できます。また、昼間の消費電力は約17kW低減できます。

さらに、「蓄熱システム」を採用する事で、従来システムでは約50HP必要な冷凍容量を40HPに小さくする事ができました。（冷凍機容量 10HPダウン）

2. フロンガス漏洩問題への対応（温室効果ガス排出量低減）

「ブライン冷却システム」は、環境先進国のアメリカやヨーロッパなどで多く採用されている冷却システムであり、フロンガス漏洩を大幅に減らす事ができる「フロン問題対応型システム」です。

フロン問題の対策の1つとして、アンモニア冷媒を使用したノンフロン蓄熱システムを提案していましたが、今回は、不特定多数の方が利用する等の理由により、採用されませんでした。

フロンガスの漏洩は、冷凍冷蔵設備の配管ジョイント部分から多く発生すると言われています。ウルトラ エコ・アイス システムは、冷蔵庫の冷却配管にフロンガスを使用せず、ブライン（不凍液）を使用する事で、フロンガス漏洩量を大幅に低減できます。現在多く使用されている代替フロンガスの温暖化係数は、CO_2に比べて約2000～4000倍という高い数値です。フロンガス漏洩量を低減する事で、温室効果ガスを年間で約58t低減する事ができます。

3. 商品の高鮮度保持

「ブライン冷却システム」は、冷蔵庫内の商品を高鮮度に保持する事ができる「高鮮度保持型システム」です。

従来のフロン直膨システムは、冷蔵庫を冷却する際に冷却温度と冷蔵庫内の温度差が大きい為、冷却器に霜が付くため、冷蔵庫内の水分を取り去ってしまいます。それに比べて、「ブライン冷却システム」は、フロン直膨システムよりも冷却温度を自由にコントロールできるので、冷蔵庫内の水分を必要以上に取り去る事がありません。そのため、冷蔵庫内の青果物を高鮮度に保持する事ができます。

お客様紹介

桐生地方卸売市場(株)・桐生青果(株) 様　（群馬県みどり市）

関口栄三社長様(左)、関口富夫専務様(右)

青果市場の冷蔵倉庫に、㈱ヤマトのウルトラ エコ・アイスシステムを導入された桐生地方卸売市場㈱・桐生青果㈱の代表取締役社長　関口栄三様、桐生青果㈱専務取締役　関口富夫様にお話を伺いました。

――ウルトラ エコ・アイスシステムに期待されることは何でしょうか?

＊（関口社長）省エネの効果と、電気料金の削減ができるのではと期待しています。

＊（関口専務）現在使用している冷蔵装置は市場内の商品置き場にあり、ジャバラ式の壁を天井から降ろして商品を囲い冷却する方式です。毎日、商品の入出庫時にジャバラを上げるので、冷気が逃げてしまいます。

――その方式と比較すれば、大幅な省エネ効果が期待できますね。一般的な冷却システムによるプレハブ式冷蔵庫と比較すると、エネルギー使用量はほぼ同等ですが、夜間蓄熱によってランニングコストの低減が可能です。

＊（関口社長）夏場に、電気代がどのくらい下がるのか、大いに期待しています。

＊（関口専務）フロンガスの大気中への漏れといった、フロン問題への対応にも、ウルトラ エコ・アイスシステムはフロンガスが漏れやすい部分にブライン（不凍液）を使っているので、地球温暖化防止に効果があると思っています。

桐生地方卸売市場(株)様 外観

青果市場内にある既存の冷蔵装置。(天井からジャバラが下降し商品を冷蔵する。)

ウルトラ・エコアイスシステムが導入された冷蔵庫の外観

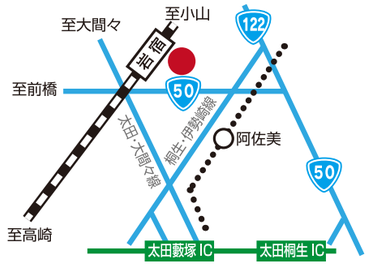
桐生市場の役割

毎日の生活に欠かすことの出来ない青果物・水産物・食肉・漬物・鶏卵などの生鮮食料品を卸売する桐生市場は、卸売市場法に基づいて設置された市場です。

生鮮食料品は一般の商品と異なり、鮮度が落ちやすく保存が困難なため、生産量の変動によって価格が極端に上下するという特性があります。そのため、取引を放置すると業者間での無駄の多い競争や不正な取引が生じやすく、生産者や消費者が多大な迷惑や不利益を被ることになりかねません。

桐生市場は、公正かつ迅速な取引を確保し、衛生的な設備を整え、安心・安全な生鮮食料品の円滑な供給を図るため、卸売市場法に基づいて管理・運営されています。

皆様のご家庭に旬の野菜、
果物、魚介類をお送りします。



桐生地方
卸売市場株式会社

代表取締役 関口 栄三 様
〒379−2311
群馬県みどり市
笠懸町阿左美2761-1
TEL 0277-46-6282
FAX0277-46-6283